

課題研究趣旨

中名寄小学校放課後活動における森林環境教育

-ヒメギフチョウ飼育から-

柳原高文*

名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科

1. はじめに

名寄市立中名寄小学校は、自然豊かな農村地帯に位置する全校児童17名の小規模校であり、特任校として市内のどこからでも児童を受け入れている。課題研究として、放課後の時間を利用して学校近隣の寺社林、通称神社山(以後神社山)で、森林環境教育を2017年6月から行っている。2018年6月、活動している神社山でヒメギフチョウの卵を採集することができた。ヒメギフチョウは準絶滅危惧種で、幼虫の食草であるオクエゾサイシンも同じく絶滅危惧種である。この自然度の高い地域だから生息できるヒメギフチョウを飼育することで、児童に自分たちが生活をしている地域の環境を守ろうという意識が生まれるのではないかと考えた。

2. 研究方法

ヒメギフチョウの卵が産まれているオクエゾサイシンを、2株神社山から採集し、幼虫の飼育を行った。中名寄小学校の3、4年生は複式学級である。1学期の指導内容に、3年生理科「チョウを育てよう」、4年生理科「季節と生き物」があるため、理科の授業の一部(時数14)を使ってヒメギフチョウの飼育・観察を3年生3名、4年生3名で行うことになった。ヒメギフチョウの卵採取から8日で孵化し、その後5齢まで脱皮を繰り返し、孵化してから37日で蛹化した。以後、来年の春まで蛹で過ごすことになる。自然環境と異ならないように、蛹はミズゴケを敷いた植木鉢などに入れ、寄生蜂などが蛹に卵を産み付けないようにネットをかけ、屋外の軒の下に放置することになった。今回の活動では、ヒメギフチョウの卵を採集し、蛹になるまでの飼育を小学校3、4年生の理科の授業を利用して行い、児童の気付きを8枚のワークシートから考察した。

3. 考察

児童の観察を記録したワークシートを読むと、ほぼ全員「孵化したばかりの幼虫は、なぜ集団行動をするのか?集団行動をしないと死んでしまうのはどうしてなのだろう?」という疑問を持っていた。詳しく解明できていないが、自然界でヒメギフチョウの幼虫が生き抜くには天敵のアリからのがれることなど、集団行動をとることでリスクを回避できることが理由と考えられている。また、集団にはリーダーが存在し、リーダーが食草を食べ始めると他も食べ始めることなど、教科書で扱われているモンシロチョウの観察とは異なる生態をしていた。このように、生息地域の環境にあわせて幼虫がくらししていく様子を観察した児童は、自然の不思議を知ることができた。さらに、3年生女子2名のワークシートを読むと、「かわいい」という言葉が随所に書いてあった。事実、観察している際も食草を食べている幼虫を見て「かわいい」と言っていた。このことは、飼育することで生き物への愛着が生まれる、1、2年生で既学した生活科内容「動物を飼ったり、植物を育てたりしてそれらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは、生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。」(文

*責任著者 E-mail:salix@nayoro.ac.jp

部科学省、2014) にもつながっている。このように、児童の記録したワークシートから、ヒメギフチョウへの愛着が生まれ、ヒメギフチョウが生息できる地域の環境を守ろうという意識が生まれてきていることが分かった。

なお、本研究の結果は2019年度名寄市立大学社会保育学科紀要に掲載予定である。

